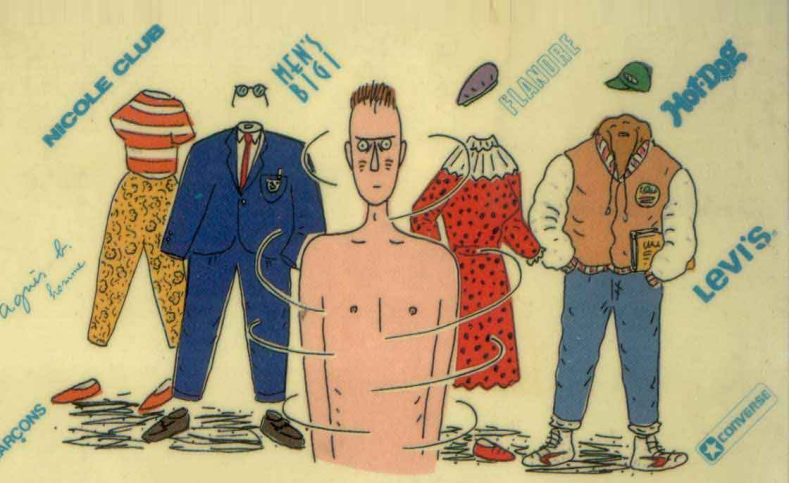


787
講談社現代新書

ことばを失った若者たち

'80s現象

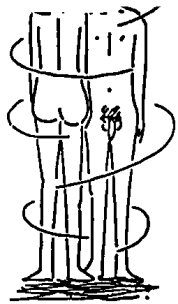
一方通行、言いっぱなしの落書きや投書。
アニメ・キャラクターに恋する女の子に、
少女マンガに夢中の男の子。**万物の商品化**
性のモード化 〈コトバ〉は宙に浮き、〈性〉の臭いは消えていく。
「しょせん世の中なんて動かない。そこで楽しくやるしかない」
圧倒的な現実肯定と無力感が若者をおおう。**からだの〈モノ〉化**
コミュニケーションの回路を失った彼らを通して
差異の崇拝 日本社会の変容を分析する。

桜井哲夫

ことばを失った若者たち
昭和六〇年九月二〇日第一刷発行　昭和六〇年一〇月一五日第二刷発行
定価——四八〇円
著者——桜井哲夫
©Tetsuo Sakurai 1985 Printed in Japan

発行者——野間惟道　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二一二　郵便番号一一二　電話〇三—九四五—一一一一
装幀者——杉浦康平＋赤崎正一
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
ISBN 4-06-145787-X(0)
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。（学1）

桜井哲夫



ぼを失った若者たち

Illustration

P.165●塩井　孝

Photo Credit

P.8　●高橋留美子／小学館・キティ・フジテレビ

P.10 ●柳沢きみお

P.46 ●毎日新聞社

P.65 ●永島慎二

P.67 ●毎日新聞社

P.75 ●青柳裕介

P.113●読売新聞社

P.182●ＴＢＳ

●目　次

プロローグ……7
アニメキャラに恋する／「学メロ」マンガの流行／中性的な若者たち／子どもたちの異変／肉体に対する実感のなさ／においの消失／言いっぱなしの〈ことば〉／単語による会話

1―〈中間文化〉の出現……27
ちょうちん型文化構造／テレビの生みだす「日常性」／擬似イベント／ラジオは深夜を解放する！／「パック・イン・ミュージック」／「新しい口語」のスタイル／他人志向型の美点／エレキブームからGSブームへ／「無目標社会」の出現／自己目的的論理／植木等の「無責人男」

2―遠くへ行きたい……54

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

何でも見てやろう／海外に飛びだす若者たち／〈からだ〉のうごめき／永島慎二の「フーテン」／〈フーテン〉の風俗化／〈旅〉も〈家出〉も商品化された／『COM』と『ガロ』／青春マンガの発見／自己表現への衝動

3——〈母〉という制度……79

赤頭巾ちゃん気をつけて／キャラメル・ママ／人工的教育装置としての〈母〉／虚構のなかでの〈母殺し〉／家族帝国主義／混然一体となった愛憎／近代産業社会の要請／全共闘のなかのプロテスタンティズム／あなたはどうするのか！／近代がもちこんだ難問

4——〈ことば〉への不信……106

日本語への反撥／〈からだ〉と〈ことば〉のずれ／全共闘運動のなかの矛盾／シラケの時代／対立に対する恐怖／「迷惑をかけない」ことの意味

5 ―「あいまいな境界」の崩壊……126
「間」の文化／住空間の変容／自殺する子どもたち／彼らに何が起こっているのか／ゆらぐ大人と子どもの境／先取りした日本社会／「僕って何」／近親相姦の舞台としてのマイホーム／ハナモゲラ語の出現／少女マンガに傾斜する男の子たち／性的同一性障害

6 ―〈モノ〉の支配のなかで……151
唯一のよりどころ／〈個電〉製品の氾濫／絶え間のない音の支配＝ウォークマン／際限ないデジタル化＝電子ゲーム機／指示待ちの身体／からだの〈モノ〉化／性のモード化／ファッション・セクト／差異の崇拝

7 ―戯れの時代……173
プライヴァシーの解体／規範なき状況／万物を商品化する社会／水戸黄門の見られ方／約束事の細分化／言葉のダラク／〈モノ〉が〈コ

ト〉化されない／しょせん世の中は動かない／ダブル・バインド状況／浅田彰の戦略／〈スキゾ・キッズ〉の逆説／「甘え」からの解放は解放か／とるべき道は

エピローグ……202

青年は荒野をめざした／出会い／〈聞く〉ちからについて／〈ことば〉が受け入れられる空間／みんな聞いてもらいたいのだ／J研究会／退行の場としてのサークル／逃げ場の確保を

あとがき　218

巻末付録　年表一九六〇―七九　222

プロローグ

アニメキャラに恋する

「ニジコン」というのをご存じだろうか。「ロリコン（ロリータコンプレックス）」なら知っているが、「ニジコン」とは何だ、といぶかる人が多いかもしれない。「ニジコン」とは、「二次元コンプレックス」の略で、アニメーションやマンガの二次元的（平面的）なヒーローやヒロインに恋焦がれてしまう、という若者たちの自閉状態を指しているのである。

たとえばアニメ雑誌『月刊ＯＵＴ』編集部には、よく次のような手紙が送られてくるという。

「わたし○○というアニメ番組を見ているうちに、その中に登場してくる○○というキャ

人気アニメキャラ「うる星やつら」のラムちゃん

ラクターのファンになり、ついに一人の男の子として好きになってしまったんです。アニメキャラに恋することって、こんなに辛いことだなんて思いませんでした。だって現実の男の子を好きになったのなら、会うことができるし、告白することができる。交際することも不可能ではない。しかしアニメキャラだとそういうわけにはいきません。片思い以上のものはありません。生きているところがちがうからです。わたしは現実の世界に生き、○○はアニメという架空の世界に生きています。だから絶対に結ばれることがないんです。

この間友だちの女の子から男の子を紹介されました。その男の子は、後でわたしに『つきあってくれ』と言ってきました。けれどもそん

な、一回ぐらい会ったくらいで人を好きになれるのでしょうか？　それにわたしには愛する○○がいます。○○を裏切ることなんてわたしには絶対にできません」

『月刊OUT』編集長の大徳哲雄は、男の子たちの美少女キャラクターへの熱中についても、アニメファンダムにおけるロリコン旋風として触れ、この現象について次のように言う。

「アニメキャラは自分を裏切ることもしなければ、また現実の人間のように自分を〝拒否〟することもない。（中略）二次元コンプレックス患者の多くは自分自身にもコンプレックスを抱き現実の異性に拒否された経験を持つ者がほとんどなので、立体感がないだけにより抽象的・記号的で容易に感情移入できる二次元のアニメキャラクターを現実の人間よりも選んでしまうのである」（「アニメ二次元コンプレックスの諸相」『ポガード』一九八四年二月号）

「学メロ」マンガの流行

ことは、アニメーションだけではない。マンガの世界でもロリコン現象についてはすでに指摘されてきている。少年マンガの世界では一九七〇年代末から「学メロ（学園メロドラマ）」もの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「学メロ」ものの先駆け「翔んだカップル」(柳沢きみお)

と呼ばれる奇妙なマンガが流行し始めた。あだち充や村生ミオらの「学メロ」ものは、いずれもはっきりしない純情な男の子ばかりで、好きな女の子がいても、話しかけられもしないし、手も握れない。ひたすらウジウジと悩むという非常に奇妙なマンガの愛読者たちは、「マンガを読む前に手を洗おう。劇画を読んだら手を洗おう」と言いかわしているというのである。

なぜ、「学メロ」マンガを読む前に手を洗い、劇画を読んだら手を洗うのか、といえば、「学メロ」の世界は、「清潔な帝国」だからである。そこは、女の子を前にしてウジウジと悩む男の子が、にもかかわらず女の子に好意をもたれ、それでいて具体的な性関係がえがかれることはないという一種の自閉した世界なのである。し

たがって生身の肉体がぶつかり合い、性表現が露骨な劇画を見たあとは、ケガレを清めるために手を洗わなくてはならないというわけだ。

たとえば、村生ミオの「結婚ゲーム」では、高校生の男の子が担任の女教師と結婚しているという設定なのに、この二人には肉体関係がまったくない。ここからいわゆる美少女マンガ（ロリコンマンガ）まで、〈性〉の〈におい〉というものがまるで希薄なのである。

ロリコン・ミニコミ誌を出しているマンガ評論家の藤本孝人は言う。

「ロリコン族の少年は、優しくておとなしい子が多いですね。同世代の女の子に声をかけられないから、年下の少女に魅力を感じ、一生懸命絵にして自己満足している。メカが好きなのも特徴です。機械は自分を裏切りませんから」（「ロリコン世代を慰めるウジウジ漫画の大流行」『週刊朝日』一九八二年五月一四日号）

中性的な若者たち

マンガやアニメのキャラクターへの恋心は、肉体的なものへの嫌悪を伴っているようにも思える。ギラギラした体臭はまったく感じられず、奇妙に中性的な雰囲気をもった若者たちの存

在は、一体どういうことなのだろうか。

この現象を考えてゆくと、一九七〇年代に十代の女性にひろがり始めた「思春期やせ症」や、一九八〇年代に入って若い男性のあいだに拡大してきた「醜形恐怖症」という精神病理、あるいは「性的同一性障害」という病理にまでゆきつくように思える。ごく簡単に説明しておこう。

まず、「思春期やせ症」というのは、食事を摂らなくなって、体重が三〇キロを割り二五キロくらいまでにやせてしまう。底にあるのは、女性的な肉体をもつことへの恐怖であり、成熟拒否である。これに対して男性のほうの「醜形恐怖症」というのは、「鼻が低い」「下あごがとがっている」「顔がふけている」というように容姿の悪さにひとり悩みこみ、何度でも美容整形手術を受けようとする一種の対人恐怖症である。「醜いから人に嫌われる」という思いこみのあまり、鏡に向かいあって、何時間でも自分の顔の理想像を追い続けるのだ。おそらくこれもまた「やせ症」と同じく、自分の肉体への嫌悪感に根ざしているように思われる。

どういうことなのだろうか。どうも次第に自分の肉体というものに対する具体的な実感というものが失われてきているのではないだろうか。肉体の現実感が失われる状態では、「男であること」「女であること」という性的同一性も保障されにくくなる。それが、近年増大しつつある「性的同一性障害」という病理なのだ。結婚しても、不潔だからといって妻と肉体的な関

係をもとうとしない若い男性の存在が精神科医のあいだで話題にもなり始めてきている。

こうした一連の現象は、けっして「成熟拒否」だの「モラトリアム」だのといった通俗化された概念ではとうてい説明がつかないように思われる。なぜなら、こうした肉体への実感の喪失という現象は、幼稚園児から社会人にまでひろがりをもった現象だからである。ここで、次に子どもたちの世界に生じている異変について事例を述べてみたい。

子どもたちの異変

一九七二年頃に、ヒモを結べない、ナイフを使えない子どもが話題になった。その後もさらに奇妙な現象があちこちで報告され始めている。たとえば、都心の私立女子中学一年生が友だちの家にとまった翌朝、友だちが冷たい水で顔を洗うのをみてびっくりしたという話がある。彼女はこれまで一度も水で洗顔をしたことがなかったのである。朝、目をさますと母が温かいオシボリを持ってきてくれるというのである。これは、いささか極端な例だとしても、子どもが顔を水で洗わないという現象は拡大してきているらしい。

「五年ほど前、東京、神奈川などの約千人を対象とした調査では、両手で水をすくい顔を

洗う動作を、ほとんど（七〇―七五％）の子どもができるようになるのは平均七歳半。昭和十一年の同様な調査では、四歳だった」（「子ども新時代」第一五六回、『朝日新聞』一九八四年一一月一一日）

あるいは、埼玉県のある小学校で三年生三六人に卵を割らせてみたら、ボウルのふちにたたきつけて殻を割り、中身をボウルに入れられたのは五、六人。四、五人はどうしたら中身がでてくるのかわからず、そのうち二人は、両手でグシャッとつぶす始末だった。子どもたちのほとんどが、卵を割るのは初めての体験だった。さらに、ナイフでの鉛筆削りができるのは、保育学会の一九八二年調査では、小学六年生で四五パーセントにすぎなかったともいう（「子ども新時代」第一七九回、『朝日新聞』一九八四年一二月八日）。

もう少し別の角度からみてみよう。一九八二年に国立教育研究所がまとめた調査がある。東京、岩手、岡山、福岡で農漁村から都市部まで平均的に選んだ小学一年生から三年生まで計一二三〇人を対象にしたこの調査で、子どもたちの六一・七パーセントしか実際に牛を見たことがない（男子六六・一パーセント、女子五六・八パーセント）ことが明らかになった。ほかの動物にくらべると、農村から姿を消し、動物園にもデパートにもないからしい、とこの調査を伝え

る新聞は書いている（『朝日新聞』一九八二年七月一四日夕刊）。

肉体に対する実感のなさ

いずれもこれらの現象は、自分の身体を動かすことや具体的な自然や事物との接触が失われてきていることを示している。たしかにひとつには、都市化、機械化の進行のためだということはいえるだろう。だがしかし、そのように単純に推論をたてるだけでは、身体感覚のこのように拡大してゆく異変を説明しきれるものではない。

そして、このような自分の身体＝肉体に対する実感のなさは、ナイフで手を切ってみたら血が出るのだろうか、と考えてナイフで実際に手を切ってしまう小学生の存在や、公園に寝とまりする老人の失業者たちを襲う小・中学生の存在とも密接に結びついている。つまり、そこには痛みというものの実感が失われてしまっているのである。

一九八三年二月に横浜で起こった中学生グループによる「浮浪者狩り」と称する無差別殺人に触れて、川本三郎は藤原新也との対談でこう述べている。

「浮浪者や老人を『汚物』として排除できてしまうという心理の背景には、人間に対する

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton